特別支援教育の扉 №９９　　令和６年４月22日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

「教育のユニバーサルデザイン」

１　教室環境のＵＤ

（１）視覚的な刺激を減らす（子どもの成長に合わせて掲示物を変える）

・前面だけでなく、側面や背面の視覚刺激も工夫する。
・全校、全学年で統一する物と、学級の実態に合わせて調整する物を整理する。

（２）聴覚的な刺激を減らす（静けさは最大の支援！）

・教室内外の音を徹底的に減らす。
・「ひそひそモード」「サイレントモード」で話ができる状況を設定する。
・教師が雑音にならない。（言葉を減らす、非言語を使う、大事なことは子どもが話す）

２　授業のＵＤ

（１）焦点化：シンプル（授業のねらいや内容、その時間で伝えたいことを絞る）

・子どもに授業でつかんでほしいこと、気付いてほしいことを的確に届けられるように、学習活動と活動をシンプルにする。
・焦点化されていないと、指導も評価も全て曖昧になる。（活動あって学びなし）

（２）視覚化：ビジュアル（電子黒板やイラストの提示、動作化を通して理解につなげる）

・「具体的に見せる」視覚化から、「思考の見える化」「思考の流れの見える化」等、より抽象的な視覚化へステップアップしていく。
・何を、いつ、どのタイミングで、どのように提示して見せるかを工夫する。
・目、口、耳、手のマークを作り、今は、どの力を使って学ぶときか示す。

（３）共有化：シェア（多様な見方・考え方に触れ、自分の考えを深める）

・思いをうまく伝えられない子どもの意見を引き出すために、対話だけでなく、付せんやタブレット等を活用して、文字による意見の共有方法も取り入れる。

例：歴史上のある人物の政策について、よい政策だと思う人はピンク、悪い政策だと思う人は青を選択して、その理由も含め授業支援アプリに投稿する。そして、グループで意見交換をしたり、友達の意見を読んで自分で考えをまとめたりする。終末にもう一度意見を投稿して、自分の考え方を見つめ直す。

３　人的環境のＵＤ

（１）認め合う雰囲気がある学級（学び合いは聴き合いから）

・人の話を頷いて聴く子ども、「へー」「なるほど」とつぶやく子ども、メモを取る子ども等、「聴き合い」ができる学級の風土をつくる。
・「違い」や「誰もが違うこと」を大切にした文化をつくる。

（２）教師の在り方（個を見る目、集団を見る目、個と個を結ぶつながりの目をもつ）

・丁寧な言葉遣い、声の抑揚、リズム、スピード、視線、ジェスチャー等を工夫して、子どもの心と体に届く話し方を心掛ける。（教師の姿は子どもの学びのお手本）

参照：「特別支援教育研究」2024.4

とれたて直送便

「今は、練習中」

転園してきたK君はスプーンとフォークで給食を食べています。ある日、周りの子どもから「お箸で食べないの。赤ちゃんみたい」という声があがりました。先生が「K君は練習中なの。みんなも練習したよね」と話すと、なにやら納得したようで、落ち着いて給食を食べ始めました。今の姿は、「できない」ではなく「練習中」。やがてできるようになる子どもへの信頼と大丈夫だという優しさが含まれている言葉です。「どうしてできないの！」と言いたくなったら、「今は、練習中」と声に出してみると、気持ちに余裕が出てくるように思います。